

200400182A

厚生労働科学研究研究費補助金

萌芽的先端医療技術推進研究事業

極細ファイバー関節鏡とその付属機器の開発に関する研究

平成16年度 総括研究報告書

主任研究者 伊藤 陽一

平成17 (2005) 年 4月

## 目 次

I. 総合研究報告	
極細ファイバー関節鏡とその付属機器の開発に関する研究-----	2-7
伊藤 陽一	
II. 研究成果の刊行に関する一覧表	----- 8
III. 研究成果の刊行物・別刷	----- 9-10

総合研究報告書

極細ファイバー関節鏡とその付属機器の開発に関する研究

主任研究者 伊藤 陽一

研究要旨

関節鏡視下手術は、整形外科領域で比較的頻度の多い手術方法である。一般的に、約4mm径の硬性関節鏡が必要であり、一方向刺入のみであるため、関節内での鏡の動きと視野に関して、多くの制限を有する。一方、関節鏡視下手術の際には、関節鏡刺入とは別の場所より、組織切除用等の器具を挿入する必要がある。これらの一連の操作上で煩雑な点は、鏡自体には手術器具がついていない点にある。現在の技術では鏡自体に約4mm径必要であり、鏡に手術器具を付加させると、鏡の径がより増大するため、手術侵襲低下と、関節内での鏡の動きの自由度改善の両方において、鏡の径の低下が必要不可欠である。そこで、本研究においては、関節鏡の径を極限まで細くすることと、関節内での柔軟な動きを得るために、極細ファイバー関節鏡の開発の可能性を検討した。

まず、本研究計画の最初に、既存ペンタックス社製のファイバー内視鏡の使用可能性の検討を行った。現在の硬性関節鏡では、鏡は基本的に外筒により保護されている。その外筒中に、耳鼻科領域で使用中のグラスファイバー内視鏡を挿入して、実際に鏡視が可能かを判断した。検討した内視鏡は、FNL-7RP3、VNL-1130、VNL-1130Rの3機種であった。FNL-7RP3は画像鮮明度に乏しく、VNL-1130はアングル長と有効長が長過ぎると判断出来た。VNL-1130Rは画像鮮明度も許容範囲であり、十分な視野確保も得られた。しかし、前2機種と同様に、ファイバー内視鏡自体が硬性鏡の外筒内を容易に回転してしまうため、鏡視の方向が正確に把握出来ず、手術操作の困難さを認めた。また、アングル基部が関節軟骨間に挟み込まれて損傷を受け、内視鏡の耐圧性に問題を認めた。以上の結果より、耐水性に関しては、既存のファイバー内視鏡で十分と判断出来た。しかし、鏡視方向の正確な把握目的には、外筒とファイバー内視鏡の間のロック機構をつける必要があると判断出来た。さらに、内視鏡の耐圧性に関しては、外筒に保護されている部分には問題は少ないが、外筒外で関節内に露出する部分に関しては、ファイバー内視鏡の必要長の検討と、ファイバー内視鏡の外側被覆している、ゴムの素材の改良が必要であると考えられた。

その結果をもとに、オリジナルファイバー内視鏡（EA-Y1170）と外筒ロック機構を開発した。開発機器に関して、アングル角度、視野角度、観察深度、グリップ形状、送水流量、彎曲部分の長さ、外筒ロック機構の固定状況等を検討した。動物実験において、実際に関節鏡視を行い、実際の鏡視可能性及び内視鏡の操作性等を判断した。関節鏡手術中に、鏡視画像をパーソナルコンピューターに取り込み、記録した。さらに、鏡視写真もあわせて記録した。これらは、開発機器と従来の硬性関節鏡の両方で行い、両者の比較検討を行った。画像検討事項とし

ては、静止画像の鮮明度、動画画像の鮮明度と画像の振れの有無を中心に行った。

開発機器では、関節鏡操作時に外筒からの還流液の漏出を防ぎ、かつ、関節内に挿入されてアングル角度を自由に変更できる部分の長さ調節が、十分に可能であることが確認できた。また、鏡視画像の動画静止画ともに、実際の臨床利用に問題の無いレベルであることの確認が可能であった。しかし、オリジナルファイバー内視鏡の耐久性と耐圧性には依然として若干の問題がある事と、画像の明るさが不十分である事の問題点があり、極細化にはグラスファイバー内視鏡では限界があると判断できた。

そこで、石英ファイバー内視鏡の開発にも従事した。我々の用いているグラスファイバー内視鏡は、可視光線の透過性に優れた光学ガラス素材を用いた $\phi 50\mu\text{m}$ の光学ガラス製の光ファイバーであった。一方、石英ファイバー内視鏡は、コアに純粋石英を用いており、透過ロスはいくらか少なく十分な光量が得られると判断できた。我々は、外径1mm、画素数12000画素で視野角度70度が可能になる石英ファイバー内視鏡をあらたに開発し、極細化への挑戦としては、外径0.4mm、画素数6000画素で視野角度70度が可能になる石英ファイバー内視鏡の開発を行った。石英ファイバー内視鏡において、極細化は可能となったが、グラスファイバー内視鏡のような軟性鏡ではなく直視鏡であるため、鏡先端部分の可動性がなく、柔軟性において劣っていた。よって、日常臨床においては、グラスファイバー内視鏡と、石英ファイバー内視鏡を適宜使い分ける必要があると判断できた。

#### A. 研究目的

関節鏡検査及び関節鏡視下手術は日常よく行われている検査方法あるいは手術方法である。最も頻繁に行われている関節は膝関節であるが、最近では肩関節、肘関節、足関節、手関節等にその範囲は拡大されつつある。また、場所により若干異なるが、一般的に、関節鏡には約3から4mm径の硬性鏡が必要である。原則として、関節鏡はあくまで一方向刺入のみであり、関節内での鏡の動きに関して、多くの制限を有する。さらに、解剖学的構造によって、一方向のみの鏡視しか出来ない場合があり、関節内構造物の位置関係から死角になる部分もあり得る。これらの改善のためには、鏡の先端が多方向を向くことが可能であったり、より細い径で深部までの進入が可能であったりすると、現在の鏡視像よりも改善

が期待でき、より低侵襲で十分な病態把握が可能になると思われる。

一方、関節鏡視下手術の際には、関節鏡刺入とは別の場所よりポータルを作成し、組織切除用あるいは組織縫合用の器具を関節内に挿入することによって、鏡視下手術が可能になる。これらの一連の操作上で煩雑であることは、鏡自体には操作用の器具がついていない点である。現在の技術では鏡自体に約3から4mm径必要であり、鏡に手術操作用の器具を付加させると、鏡の径がより増大するため、手術侵襲と関節内での鏡の動きの自由度の両方においてマイナスである。つまり、鏡の径を小さくすることが必要不可欠である。

そこで、本研究においては、関節鏡の径を極限まで細くすることの挑戦と、鏡視下手術に必要な器具を関節鏡に付加させて、より安

全な関節鏡視下低侵襲手術方法の確立を目的とする。

現在使用されている内視鏡はグラスファイバーが用いられているため、極細ファイバー関節鏡の開発が必須であろうと考えている。整形外科疾患の中で、変型性関節症を中心とした関節疾患は大多数をしめている。極細ファイバー関節鏡の開発が可能になれば、それらの治療に際して、低侵襲での正確な鏡視下手術が可能になり、患者にとってより安全、安心な医療技術の提供を図ることが可能になり、さらには、入院を必要としない外来手術によって、医療費の軽減にもつながる。

## B. 研究方法

日本は内視鏡の分野では独自の発展をし、技術的にもすぐれた製品を開発しており、特にグラスファイバーの進歩は著しい。今回、外科領域や耳鼻科領域において広く使用されているグラスファイバー内視鏡に対して、< I >整形外科領域における応用の可能性の有無の検討、< II >改良項目の抽出と改良方法の検討を行い、ついで、< III >オリジナルファイバー関節鏡の開発を行った。実際の研究実施においては、(1)現在のグラスファイバー内視鏡の使用の可能性の検討、(2)グラスファイバー内視鏡の耐水性の獲得、(3)グラスファイバー内視鏡の耐圧性、耐久性の獲得、(4)関節内での実際の鏡視と可動性の確認、(5)鏡視画像の評価の順に行った。

本研究計画の最初に、耳鼻科領域において広く使用されているグラスファイバー内視鏡に関する、基本的な情報収集を行った。最も情報交換が容易な手段として、当大学病院の

耳鼻科において、実際に臨床使用されている機器の特徴、サイズ、利便性およびそれらの作成機器メーカーの特定を行った。

現在、硬性関節鏡で最も普及しているサイズは4mmの30°斜視鏡である。鏡は基本的には外筒により保護されている。その外筒の中に、外科及び耳鼻科領域で使用中のグラスファイバー内視鏡及び、開発機器であるオリジナルファイバー関節鏡を挿入して、動物実験(羊使用)において、実際に関節鏡視を行い、実際の鏡視可能性及び内視鏡の操作性等を判断した。関節鏡手術中に、鏡視画像をパーソナルコンピューターに取り込み記録し、鏡視写真もあわせて記録した。これらは、ファイバー関節鏡と、従来の硬性関節鏡の両方で行い、両者の比較検討を行った。画像検討事項としては、静止画像の鮮明度、動画画像の鮮明度と画像の振れの有無を中心に行った。

(倫理面への配慮)

研究過程で用いる動物種は羊である。動物愛護の面で、全身麻酔下で、疼痛の無い状況下で、清潔操作にて、極細ファイバー関節鏡を用いた関節鏡視下手術を行った。術後の抗生物質投与は実際の臨床例と同じく、術後3日間の点滴静注を行い、感染症の防止に努めた。

## C. 研究結果

当大学病院耳鼻科医師に信頼性の高い内視鏡は、ペンタックス社製であったため、同社の内視鏡の使用可能性を検討することにした。最初に検討した内視鏡は、鼻咽喉ファイバースコープ FNL-7RP3 (有効長300mm 直径2.4mm アングル角度上下130度)であった。関節腔内の鏡視はかろうじて可能であったが、画

像鮮明度は乏しく、既存の硬性関節鏡に大きく劣っていた。しかし、グラスファイバー内視鏡の耐水性は十分と判断出来た。そこで、ファイバー内視鏡の直径をやや大きくして、臨床使用上で許容可能な画像鮮明度が得られるかを判断するために、ビデオ鼻咽喉スコープ VNL-1130（有効長300mm 直径3.7mm アングル角度上下130度）を次ぎに検討した。画像鮮明度は若干硬性関節鏡に劣るが、臨床使用上では、何とか許容範囲内と判断出来た。しかし、アングル角度130°を得るために約3cmのアングル長を必要とする事と、有効長が300mmと必要以上に長い事は、操作を困難にさせている要因と判断できた。そこで、有効長の短縮とアングル角度を低下させたアングル付鼻腔鏡 VNL-1130R（有効長 150mm 直径3.7mm アングル角度上下90度）を次ぎに検討した。画像鮮明度は許容範囲であり、十分な視野確保も得られた。しかし、有効長等の低下による操作性の向上はあるが、前2機種と同様に、鏡視の方向が正確に把握出来ず、動画画像評価において、明らかに画像の振れを大きく認めた。さらに、本機種の検討中に、アングル基部が関節軟骨間に挟み込まれて損傷を受けた。

以上の結果から、硬性鏡外筒併用下で、有効長150mm、直径3.7mmアングル角度90°の既存ファイバー内視鏡の使用は可能であった。また、耐水性は良好であったが、耐圧性に問題を残した。さらに、硬性鏡外筒内でグラスファイバー内視鏡が回旋する事と、外筒外部の内視鏡長が不確定である事で、制御性に問題があった。最後に、現段階では、外筒除去は困難と判断できた。

そこで、オリジナルファイバー関節鏡の開

発における改善項目として、回旋制御目的のロック機構を完成する事。ついで、マーカーク印によって、内視鏡長調節を可能にする事。耐圧性、耐久性の向上目的には、硬性部分を含む事を基本に開発を進めた。

オリジナルファイバー関節鏡EA-Y1170の開発を、スミス&ネフュー社とペンタックス社の協力の下に行った。直径3.7mmで、視野角度120°、観察深達度2~30mm、アングル角度90度、硬性部長200mm、刺入部長調節目的に第二彎曲部30mmの追加を基本とした。さらに、EA-Y1170には、外筒との間のロック機構と、内視鏡長調節のためのマーカーク印を追加した。（図1）

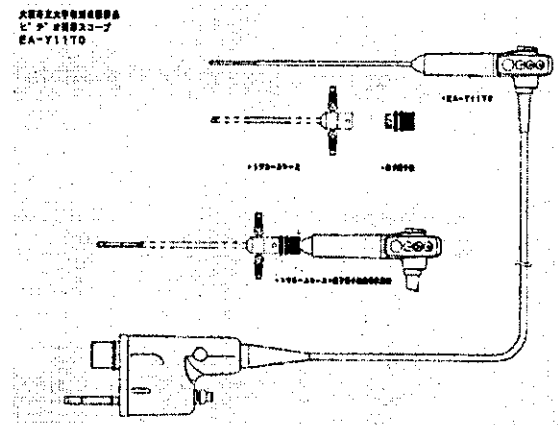


図1

その結果、本開発機器では、関節鏡操作時に外筒からの還流液の漏出を防ぎ、かつ、関節内に挿入されてアングル角度を自由に変更できる部分の長さ調節が、十分に可能であることが確認できた。

オリジナルファイバー関節鏡における実際の関節鏡画像では、良好な解像度が得られ、関節内の十分な評価が可能であった。また、マーカーク印により内視鏡長調節は円滑に行えた。さらに、アングル角度を関節内にて様々に変化させる事が可能であり、実際、硬性鏡では死角となる、関節包断裂部深部までの

鏡視が可能であった。

しかし、オリジナルファイバー内視鏡の耐久性と耐圧性には依然として若干の問題がある事と、画像の明るさが不十分である事の問題点があり、極細化にはグラスファイバー内視鏡では限界があると判断できた。

そこで、石英ファイバー内視鏡の開発にも従事した。我々の用いているグラスファイバー内視鏡は、可視光線の透過性に優れた光学ガラス素材を用いた  $\phi 50 \mu\text{m}$  の光学ガラス製の光ファイバーであった。一方、石英ファイバー内視鏡は、コアに純粋石英を用いており、透過ロスは少なく十分な光量が得られると判断できた。我々は、外径1mm、画素数12000画素で視野角度70度が可能になる石英ファイバー内視鏡をあらたに開発し、極細化への挑戦としては、外径0.4mm、画素数6000画素で視野角度70度が可能になる石英ファイバー内視鏡の開発に従事し、石英ファイバー内視鏡において、極細化が可能となった。

#### D. 考察

今回検討した耳鼻科用ファイバースコープ全機種において、鏡視の方向が正確に把握出来なかったのは、ファイバー内視鏡自体が硬性鏡の外筒内を容易に回転してしまうためと考えられた。そして、動画画像評価における、明らかな画像の振れの原因は、ファイバー内視鏡自体が関節内の灌流液の影響を受けて、微小振動を起こすためと推測できた。

この問題の解決策として、外筒とファイバー内視鏡の間に、ロック機構をつける必要があると判断出来、そのロック機構の完成により、軟性鏡の鏡視の方向が正確に把握出来る事と、軟性鏡の微小振動を低下させる事が可

能であった。さらに、外筒外部の内視鏡長が不確定であり、制御性にも問題があったが、マーカーク印により内視鏡長調節が円滑に行える様になった。

開発したオリジナルファイバー関節鏡に関して、画像鮮明度、アングル角度、視野角度、観察深度、グリップ形状、送水流量、彎曲部分の長さ等に関して、臨床使用が十分に可能と判断できた。しかし、オリジナルファイバー内視鏡の耐久性と耐圧性には依然として若干の問題があり、関節内での骨軟骨組織との接触で、損傷をうける可能性があった。また、画像の明るさが不十分である事の問題点もあり、極細化にはグラスファイバー内視鏡では限界があると判断できた。

そこで、今回我々が開発に従事した石英ファイバー内視鏡では、コアに純粋石英を用いており、透過ロスは少なく十分な光量が得られた。我々の用いた石英ファイバー内視鏡では、極細化への挑戦として、外径0.4mm、画素数6000画素で視野角度70度が可能になった。これは画期的なことであり、従来の石英ファイバー内視鏡とは格段に極細化が可能になった。開発器機は、非常に柔軟性に富み、耐久性も優れており十分臨床利用が可能であると判断できた。石英ファイバー内視鏡において、極細化は可能となったが、グラスファイバー内視鏡のような軟性鏡ではなく直視鏡であるため、鏡先端部分の可動性がなく、柔軟性において劣っていた。よって、日常臨床においては、グラスファイバー内視鏡と、石英ファイバー内視鏡を適宜使い分ける必要があると判断できた。

#### E. 結論

本研究の結果、オリジナルファイバー関節

鏡の一応の完成が得られた。本医療機器は、従来の硬性鏡とは異なり、関節内で、その先端部分を自由に動かす事が可能であり、鏡視の範囲が格段に広い。視野角度が120度であり、アングル角度が90度であることから、最大300度までの範囲を鏡視することが可能である。これは、従来の硬性鏡の視野範囲とは雲泥の差であり、日常臨床において、その利用価値は高いと思われる。また、極細化に関しては、石英ファイバー内視鏡により達成可能であり、日常臨床において、その両者の利用価値は高いと思われる。極細ファイバー関節鏡の開発において、大きな進歩となり、臨床使用がより現実的になると思われる。しかし、手術操作機能の付加は、現段階で、達成不可能であり、今後は、ファイバー関節鏡と石英ファイバー内視鏡の両者の利点を複合した関節鏡の開発や、手術操作機能を付加した関節鏡の開発が望まれる。

整形外科疾患の中で、変型性関節症を中心とした関節疾患は大多数をしめている。極細ファイバー関節鏡の開発に伴い、それらの治療に際して、低侵襲での正確な鏡視下手術が可能になり、患者にとってより安全、安心な医療技術の提供を図ることが可能になり、さらには、入院を必要としない外来手術によって、医療費軽減にもつながると期待出来る。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

学会発表

- (ア) Yoichi Ito, You Hara, Yoshihiro Nakao, Hiroyasu Tomo, Isshin Matsumoto, Tatsuya Koike, Kunio Takaoka Qu

antitative assessment of rotator cuff muscles with magnetic resonance imaging -Comparison between tear size and muscle atrophy- Trans. ORS 51 p616 2005

- (イ) Hiroyasu Tomo, Yoichi Ito, Yoshihiro Nakao, Tatsuya Koike, Kunio Takao ka Evaluation of rotator cuff tear size with shoulder arthrography Trans. of ORS 51 p643 2005

#### H. 知的財産権の出願・登録状況 なし



研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Yoichi Ito, You Hara, Yoshihiro Nakao, Hiroyasu Tomo, Isshin Matsumoto, Tatsuya Koike, Kunio Takaoka	Quantitative assessment of rotator cuff muscles with magnetic resonance imaging -Comparison between tear size and muscle atrophy-	Trans. ORS	51	616	2005
Hiroyasu Tomo, Yoichi Ito, Yoshihiro Nakao, Tatsuya Koike, Kunio Takaoka	Evaluation of rotator cuff tear size with shoulder arthrography	Trans. ORS	51	643	2005

# QUANTITATIVE ASSESSMENT OF ROTATOR CUFF MUSCLES WITH MAGNETIC RESONANCE IMAGING -COMPARISON BETWEEN TEAR SIZE AND MUSCLE ATROPHY-

+\*Ito Y; \*Hara Y; \*Nakao Y; \*Tomo H; \*Matsumoto I; \*Koike T; \*Takaoka K

+\*Department of Orthopaedic Surgery Osaka City University Graduate School of Medicine, OSAKA, JAPAN

TEL: +81-6-6645-3851, Fax: +81-6-6646-6260, yito@med.osaka-cu.ac.jp

## INTRODUCTION:

Surgical repair of the rotator cuff tears is effective for improvement of shoulder function. Several factors influence the decision to perform surgery, including the extent of tearing and the underlying pathology of the rotator cuff muscles. Atrophy of rotator cuff muscles as the underlying pathology is an important factor influencing the outcome of rotator cuff repair. Accurate evaluation of the muscular volume is essential for good shoulder reconstruction, though it is quite difficult to measure. Magnetic Resonance (MR) images were reported to be useful for muscular volume assessment as well as rotator cuff tear size evaluations.<sup>1), 2), 3)</sup> However, factors influencing atrophy of rotator cuff muscles are not well known and the relationship between the muscular volume and the rotator cuff tear size is not well determined. The aim of this study is to evaluate the comparison between these two parameters with MR images.

## MATERIALS AND METHODS:

We retrospectively evaluated MR images of 38 shoulders in 38 patients with surgically treated full thickness supraspinatus tendon tears. Subjects included 20 men and 18 women, with a mean age of 60.8 years (Range, 31 to 77). All full-thickness tear sizes were measured transversely and longitudinally with a ruler at surgery. 12 shoulders in 12 people without rotator cuff tear were used as control. Their mean age was 29.3 years old. (Range, 18 to 40) The MR images were scanned into a personal computer and analysed by image-analysing software (NIH Image). Muscle volume was evaluated with oblique sagittal images in the 25 mm medial plane parallel to the glenoid fossa (Fig. 1). Standardized cross-sectional areas (Each rotator cuff muscle area divided by the area of the supraspinatus fossa (SF)) were measured as an indicator of the muscular volume according to the method of Zanetti et al (Fig.2).<sup>1)</sup> Supraspinatus (SSP/SF), Infraspinatus and Teres minor (ISP+TM/SF) and Subscapularis (SBS/SF) were measured respectively. We compared these measurements between in the rotator cuff tear group and in the control group. We also analysed correlation between these measurements and tear sizes: longitudinal and transverse sizes. Statistical analyses were performed using one-factor ANOVA. Statistical analysis of correlation was performed using the Fisher's protected least significant difference (Fisher's PLSD). Significance was set at the 5% level.



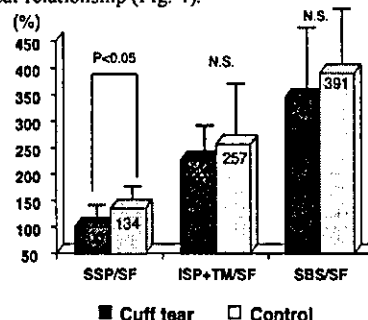
<Figure 1> Oblique sagittal images in the 25 mm medial plane parallel to the glenoid fossa



<Figure 2> Muscular volume measurements with MRI and typical image of SSP atrophy

## RESULTS:

SSP/SF, ISP+TM/SF and SBS/TM in the control group were  $134 \pm 41$ ,  $257 \pm 103$ ,  $391 \pm 137$  (%) respectively. The measurements in the rotator cuff tear group were  $100 \pm 29$ ,  $226 \pm 80$ ,  $345 \pm 128$  (%) respectively and SSP/SF was significantly decreased compared to the control. There were not significant differences on ISP + TM / SF and SBS/SF in two groups (Fig. 3). SSP/SF in the rotator cuff tear group was inversely proportional to the longitudinal tear size ( $r = -0.377$ ) and the transverse tear size ( $r = -0.452$ ) in a linear relationship (Fig. 4).



<Figure 3> Comparison between rotator cuff tear group and control group

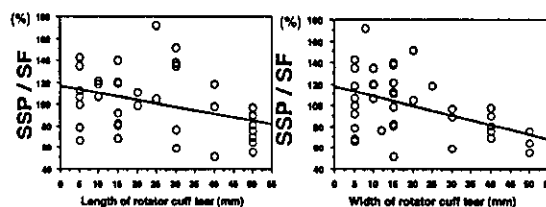


Figure 4-1

Figure 4-2

<Fig.4-1> Correlation between SSP/SF and length of rotator cuff tear  
 $Y = -0.646 X + 117.114$ ,  $r = -0.377$  ( $P < 0.05$ )

<Fig.4-2> Correlation between SSP/SF and width of rotator cuff tear  
 $Y = -0.902 X + 118.129$ ,  $r = -0.452$  ( $P < 0.05$ )

## DISCUSSIONS:

Several authors reported about the MR images evaluation of the muscular volume with rotator cuff tears. Tingart et al. reported a significant correlation between MRI and water displacement measurements in shoulder cadaver model and methodological reliability of this measurement.<sup>2)</sup> Zanetti et al. reported cross-sectional areas by MRI could discriminate patient with different stages of rotator cuff tears from asymptomatic subjects. Shimizu et al. reported atrophy of the rotator cuff muscles depends on the site of the tears.<sup>3)</sup> However, to the best of our knowledge, this paper is the first to show the significant correlation between muscular atrophy and transverse rotator cuff tear size. Our data indicates that surgical repair, particularly of large rotator cuff tears, should be performed before excessive transverse rotator cuff tearing and muscle atrophy is established.

## CONCLUSION:

Shoulder muscular atrophy was more correlated to the transverse rotator cuff tear size compared to the longitudinal tear size.

REFERENCES: 1) Invest Radiol. 1998 Mar;33(3):163-70. 2) Clin Orthop. 2003 Oct;(415):104-10. 3) Acta Orthop Scand. 2002 Jan;73(1):40-3.

# EVALUATION OF ROTATOR CUFF TEAR SIZE WITH SHOULDER ARTHROGRAPHY

\*Tomo H; +\*Ito Y; \*Nakao Y; \*Koike T; \*Takaoka K

+\*Department of Orthopaedic Surgery Osaka City University Graduate Medical School, OSAKA, JAPAN  
TEL: +81-6-6645-3851, Fax: +81-6-6646-6260, yito@med.osaka-cu.ac.jp

## INTRODUCTION:

Shoulder arthrography was first introduced by Codman in 1934 and graphically demonstrates the integrity, shape and capacity of the glenohumeral joint. It is a valuable diagnostic tool and it can yield an extremely high level of accuracy in diagnosing full thickness rotator cuff tear, adhesive capsulitis, capsular rupture, deformities of the articular cartilages, synovial disorders and abnormalities of the long head of the biceps.<sup>1)</sup> Even small partial tears on the humeral side of the rotator cuff are easily detected as well.

Current Magnetic resonance Imaging (MRI) can assist in establishing the diagnosis of shoulder disorders including rotator cuff tears.<sup>2)</sup> However, MRI cannot confirm the final diagnosis of full thickness rotator cuff tear. On the other hand, the accuracy in the diagnosis of full thickness rotator cuff tear by shoulder arthrography has been well established when leakage of contrast material injected into the shoulder joint is seen in the subacromial space. Other significance of the shoulder arthrography in rotator cuff disease is not well known. Furthermore, there is little known about the evaluation of the rotator cuff tear size by shoulder arthrography. The aim of this study is to elucidate the value of shoulder arthrography in assessing the precise size of rotator cuff tear.

## MATERIALS AND METHODS:

We retrospectively evaluated shoulder arthrography of 52 shoulders in 47 consecutive patients with full thickness rotator cuff tears that were surgically treated. There were 26 male and 21 female who had a mean age of 60.4 years. (Range, 32-74) We performed shoulder arthrography by contrast material infusion into the glenohumeral joint with a needle guided at the centre of the joint under fluoroscopic control. Minimum volume of the contrast material leakage into the subacromial space from glenohumeral joint was measured as leakage volume. (Fig. 1) Combined range of motion of external and internal rotation of the shoulder in 90 degrees of abduction was also measured under general anesthesia as rotational range of motion. Concerning rotator cuff tear sizes, we assessed the maximum longitudinal size (L), the maximum transverse size (T) and the defect area (A) of each tear during surgical procedures. We analyzed the correlation of each parameter. Statistical analyses were performed using paired t-test. Significance was set at the 5% level.



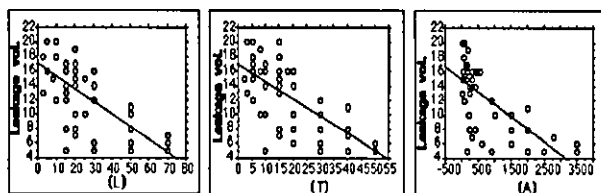
Needle injection Before leakage At leakage to SAB After leakage

<Figure 1>  
Leakage volume measurement during shoulder arthrography

## RESULTS:

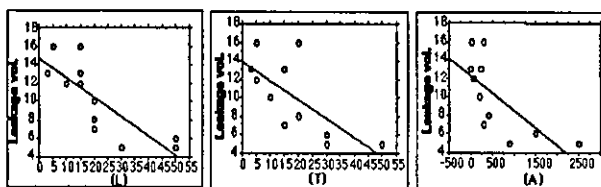
In all data, the longitudinal size, the transverse size and the defect area were inversely proportional to the leakage volume in a linear relationship. ( $r^2 = 0.471, 0.457$  and  $0.449$  respectively) (Fig. 2) In the stiff shoulder group, 12 shoulders recognized below 120 degrees in rotational range of motion, the three parameters of the rotator cuff tear size were inversely proportional to the leakage volume in the same manner. ( $r^2 = 0.641, 0.500$  and  $0.498$  respectively) (Fig. 2) In the not-stiff shoulder group, 40 shoulders recognized above 120 degrees in rotational range of motion, same correlations were observed. ( $r^2 = 0.578, 0.515$  and  $0.530$  respectively) (Fig. 2) Classification of the shoulder stiffness helped to enhance the correlation between the leakage volume and the rotator cuff tear size significantly. ( $P < 0.05$ )

## In all data



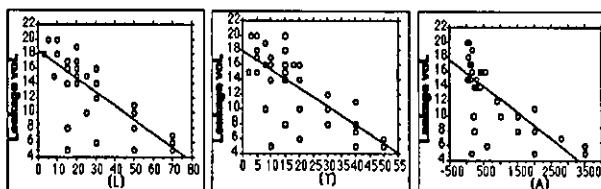
$Y = 17.141 - .175 \times X, R^2 = 0.471$      $Y = 16.815 - .235 \times X, R^2 = 0.457$      $Y = 14.889 - .003 \times X, R^2 = 0.449$

## In the stiff shoulder group



$Y = 14.665 - .209 \times X, R^2 = 0.641$      $Y = 13.776 - .203 \times X, R^2 = 0.500$      $Y = 12.276 - .004 \times X, R^2 = 0.498$

## In the not-stiff shoulder group



$Y = 18.458 - .188 \times X, R^2 = 0.578$      $Y = 17.841 - .25 \times X, R^2 = 0.515$      $Y = 15.825 - .004 \times X, R^2 = 0.530$

## <Figure 2>

Relationship between leakage volume and longitudinal size (L), transverse size (T) and the defect area (A) in all data and subdivided groups

## DISCUSSIONS:

Generally, the size of the rotator cuff tear became larger; the amount of the leakage volume became smaller. Correlation between the longitudinal size and the leakage volume is highest among three parameters. This observation have potentially important implications regarding the mechanism of the leakage from glenohumeral joint into the subacromial space in full thickness rotator cuff tear. Shoulder joint is started to be filled with the contrast material from the center of the glenohumeral joint and progressed from medial to lateral space. In the stiff shoulder group, the narrow joint space may induce the small leakage volume even in the small size of tear. On the other hand, in the not-stiff shoulder group, enough joint space may induce much leakage volume even in the large size of tear. We could recognize that shoulder arthrography is very useful for the evaluation of the shoulder stiffness and the rotator cuff tear size.

## CONCLUSION:

We can speculate the rotator cuff tear size by measuring the leakage volume during shoulder arthrography without MRI examination.

## REFERENCES:

- 1) Killoran PJ, Am J Roentgenol Radium Ther Nucl Med. 1968;103: 658-68.
- 2) Balich SM, Radiology. 1997; 204: 191-4.